

9. 新任者の声

この10か月間

住吉 貴之（淵江）

このたび初任校と同じ足立区の淵江高等学校に副校長として着任することになりました。伊豆大島に9年間。その間に主幹、管理職候補者という立場を経て、自分の立場と仕事は大きく変わりましたが、やはり4月からの変化はものの比ではありませんでした。自分ではそんなに事務仕事が遅いほうであるとは思っていませんでしたが、PCの前へばりつかなければならぬことが結構増えました。初めてVDT検査の二次検診を受けることになりました。

生活指導と授業規律に学校を挙げて取り組み、いま上昇気流にある学校であると校長から伺っていましたが、まさしくそのとおりであると感じた第1学期でした。授業観察や行事での教職員の取り組みなど、これまでとは違う視点で見ると学校が新鮮に感じられました。しかし、その中では変化を望まない生徒との衝突など、苦勞をしながら取り組まれている姿を見るに付け、もっと強力に先生方を支え、後押しできるようにならなければと強く感じました。

そして、学校の外にこれほど多くの学校を支えていただく方々がいるということ、痛感しました。PTAを経験された方々で組織されている淵高会の皆さま方とは、バス研修旅行や時節ごとの集会でつながりを深め、周年行事など様々な部分で御助力をいただいております。町会長をはじめとする町会の皆さまとは、夏祭りなどの行事や生徒のボランティアの引率などを通じて輪を広げさせていただいております。しょっぱなに強いお叱りをいただいた元区議会議員の方の御意見にも、今では私のなかのルーティンワークとなるものがありました。

若手の教員が多いのも本校の特徴でしょうか。5割弱が入都10年以内の教員です。若手教員育成研修にしっかりと取り組んでもらい、校内における相互授業見学週間を拡充させ、OJTの体制を整えることが必要です。しかし、そのようなこと以上に（と言っては語弊がありますが）、若い先生から元気をもらえるのが嬉しいと感じ

ている自分がいます。

雑多なことを書き連ねてしまいましたが、今後の淵江高等学校の充実に向けて、今後も粉骨砕身、頑張ってまいります。重点支援校として、恥ずかしくないように目を配っていきたく思っておりますが、なにぶん若輩者でございます。副校長の皆様方に、様々なご指導・ご鞭撻、ご支援をいただければ幸いです。事務局からのメールの感動的な話に涙するなど、そんなことが大変嬉しく感じる自分です。今年、目標を2つ決めました。ここでは秘密にしておきますが、相談させていただいた折には助言を賜りたいと思います。どうぞ、今後とも宜しく願いいたします。

まさか年度途中とは

平塚 浩司（足立 定）

9月16日付けで足立高校定時制の副校長に着任いたしました。昨年3月の内示では、年度当初の昇任は無く残留でした。この一年は、生活指導を行って徐々にフェードアウトしながら副校長への準備を進めていました。ところが突然8月30日の夕刻校長からの呼び出しを受けました。校長からの直接の呼び出しに、生徒が何か大きな問題でも起こしたのではないかと考えていると、校長から「9月16日から足立高校定時制の副校長だから。辞令を受け取るまでは周囲に話しても気付かれてもいけない。引継ぎと、異動の準備をなさい。」と軽くいわれました。このようなわけで、引継ぎ残務整理もほとんど終わらない状態で現在の職場に異動しました。

足立高校定時制は、普通科と商業科を持ち17クラス生徒数300名を超える夜間定時制としては都立でも1、2を争う大規模定時制です。着任するまでは、“大変なところに行くことになってしまった、困ったな。”という思いがありました。ところが、生徒は、様々な困難な状況を抱えながらも学校生活に取り組んでいました。部活動は、連日放課後は11時近くまでさらに休日も活動しています。近年定時制ではその維持さえ困

難になってきている PTA 活動も盛んで、学校の教育活動を支援してくれています。まさに“古き良き夜学”の姿がまだ少し残っています。今は、その存在自体が薄れ行く夜間定時制に在って、この足立高校定時制の灯を守り続けることが、私に与えられた使命と考えています。

今の夜間定時制には、全日制に行きたかったけれど行けなかった子、どこかの高校で挫折して再チャレンジしてきた子、若いときから働きづめで勉強の時間がなく、ご自身の子供が独立した後勉強の意欲に燃えた方、外国籍の方等様々な生徒が在籍しています。夜間定時制高校は、これらの生徒達に就学の機会を提供するという大きな使命を持っています。今の社会は、夜間定時制高校に対して必ずしも好意的とは言えません。しかし、ここに在籍している生徒にとっては最後の砦なのです。大きなことはできませんが私は、この砦を守るべく、夜間定時制高校の存在意義と、生徒の活動を広く社会に知らせたいと思っています。まだまだ微力な私ですが、先輩諸先生方のご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

副校長という仕事

前田 平作（工芸）

1 4月当初の不安

敷地内異動？（教職員研修センターから工芸高校）ということもあり、まったく初めての学校ではないと甘えた認識は、4月1日でどこかに吹っ飛んでしまいました。副校長という仕事については、前準備として研修受講や先輩副校長の話聞いていましたが、仕事が始まると、目の前にある課題（4月・5月の調査・報告がこんなに多いとは！）を処理していくことで、一日が過ぎていきました。4月当初は毎日が不安であり、このような状態が一年間続くと考えたなら、朝の電車の中で暗い気持ちになっていました。

こんなとき、研修会等で同期と会うと日々感じていることが共通のものであることから、少し安心もしたり、また励ましあったりすることで、心のバランスが正常に戻っていくことを実感したことがあります。「横のつながりを大切に

する」という何度も聞いていた言葉に、励まされている自分がいました。

2 多様な業務

5月も過ぎたころに、副校長の業務について自問自答した結果は、「学校のことを何でもやる」という結論を得ました。教育課程の管理から始まり、外部対応、施設設備の不具合の対応と本当に多様であることを実感させられました。また、副校長のスキルとしては、高いICT活用能力が要求されています。ICTのスキルアップには心と時間の余裕すらないのが現状ですが、立ち止まることはできません。このように多岐にわたる業務へのノウハウは、人から引き継ぐものではなくて、自分で蓄積するものだとも感じました。

3 やりがいを感じる時

学校には、様々な組織が混在していて、それらが有機的に機能しなければなりません。管理職としての役目は、それぞれの組織が学校経営計画に掲げられている目標を達成させるように導いていくことです。そのためには、普段からの教職員との十分な意思疎通が必要です。何気ない会話から、組織の弱点を発見したり改善のヒントをもらったりすることが実に多かったのです。これらの事柄を基にして、企画調整会議等で方向性を提案したきに、活力のある組織に進展していくことを共有できたとき、副校長としてのやりがいを感じます。

4 これからの取り組み

管理職を希望する教員が少ないのが現状です。それは、現役の我々副校長が日々笑顔で仕事できていないからではないのでしょうか。そして、副校長という仕事はどれだけ魅力があるのかを伝え切れていないからではないからでしょう。業務が立て込んでいて、つい不機嫌な顔をしてしまいがちですが、そんなときこそ、余裕がなくても笑顔をみせることを心がけることです。すると、ここからは想像ですが、本当に自分に余裕ができて、どこからか力がわいてくるにちがいない。さて、明日から実行に移そうか。

副校長になって

中間 均（蒲田）

4月からはトラバーク。2年間の任用前研修の中のどこかで聞いた言葉である。

候補者研修中はどうして実務のことを行なってくれないのだろうか？と疑問に思っていたが、いざその職に就いてみると納得できた。

いわゆる、ルーチンワークは職場それぞれで決まった環境があり、すぐに覚えることで副校長として求められている大切な仕事は人材を育成していくことであることが実感できた。

私は、エンカレッジスクールの副校長として配属されて恵まれていると思った。

それは、二人副校長制でパートナーがベテランの副校長であったためである。分からないことだらけの不安な4月であったが、細かな処理などを親切に教えていただいた。これぞOJTというものであろうか。パートナーが親切にしてくれた御恩は一生忘れない。

都の人事部の方は、いろいろなことをよくご存じであるとも思った。私のような新米には、二人副校長の所に配属して、まずはいろいろなことに慣れさせていただいたような気がしたからである。

二人副校長という制度はとてすばらしいものであると思った。私は、趣味で卓球を行っているがダブルスのようである。職場で辛いことがあっても、少なくともこの人だけは味方であるというような安心感がある。だから私の場合には、副校長の方が主幹時代よりも落ち着いて仕事ができていると思う。

ただ、いつまでも二人でやっていけることではないので、実務はもちろんのこと副校長としての本来の仕事である「校長の経営計画の具現化」をめざして早く一人前の副校長にならなければいけないと考えている。具体的に言えば、生徒が卒業式の時に「自分は、高校選びに成功した。」と言って喜ぶ姿を見られるような学校作りの策を校長の経営方針の下で考えることである。

その理想を実現するには、人材育成。教職員の力を最大限に発揮させることが大切である。いかにして発揮させるかがとても難しいことであるが、そのことに向かって仕事をしていくこ

とが今は充実してとても楽しい。

私が理想とする副校長像となる先生（かつての上司）は、「プリント1枚渡すときでも足を運んで届けろ。」とか「一人ひとりの教職員に誠意をもって接すること。」「仕事をふる時には、丸投げでなく、昨年の起案を元にしていつまでにこのようにまとめてほしい。というようにしなさい。」とかアドバイスされたことが今では大きく活かしている。

新たに感じたことは、副校長の立場としての言動には注意しなければならないということである。生活指導主幹の時のような言動とは重みが違う。校長がバックに控えているが、学校を代表しての意見としてとらえられてしまうこともあるということ認識しなければならない。

学校経営をラグビーで例えると、校長が一番サイドにいて長いラインを作っているようなもの。校長を破られてしまえば、チームは負けである。だから校長の方針を理解しながら、難しい局面で極力校長にパスするようなことがないように二人の副校長と主幹で頑張っている。

副校長としての8か月

高 幹明（墨田工業）

この原稿を書いているのが12月2日(木)、約8か月がたちました。

着任前の私は、校長・副校長先生との引継ぎ面接で、「来年度は、10月に110周年記念式典がある、4月になれば早急に具体的な準備を進めていかなければならない。」等とうかがい、果たしてその時期まで副校長としての職務を継続できているのかと、不安ばかりが募る日々でした。

着任当初は春季休業中でもあり、部活動等の関係で先生方の出張・振休用個人ファイルが、提出箱に連日多数積み重なる状況に、副校長としての不安感や緊張感を感じる余裕もなく、事務処理に忙殺されていました。しかしまずは焦らずに、その日すべきことを確認した上で職務をこなし、その日一日一日を乗り越えることを目標としました。次は1週間を目標に、その次はゴールデンウィークまでの1か月間を目標にと、徐々に職務に対する視野を広げて行こうと

心がけました。

2週間ほどすると、日々の職務をこなしていく中で、副校長としてのリズムが少しずつ感じられるようになりました。副校長の主な職務である、学校経営計画を具現化させるために学校長の指導を受けながら、自らも本校の課題を抽出・考察し、教職員に対し組織的な解決策の具現化を促すことや、日々の服務等の事務処理を迅速に処理すること、あるいはTAIMSへの対応力を向上させ、TAIMSメール文書を迅速に理解し、必要に応じて担当分掌主幹・主任教諭へ具体的な指示を出すこと等にも、徐々にではありますが対処できるようになり、すべての先生方の氏名も服務処理を行う過程において3日程度で覚えることができました。

この間、特に体をこわすこともなく、曲がりなりにも職務を遂行できたことは、校長先生をはじめとした職場の先生方等、職場環境に恵まれたことと感謝しております。

都立高校の先生方の資質・能力は非常に高く、その力は学校を活性化させていく上でもっとも重要な要素であると思います。先生方の力を結集し、学校全体で活性化を図ることができるよう、仕切り役としての副校長の役割は重要です。

私自身も、副校長先生方との情報交換等を重視し、仕切り役としての力を身につけていきたいと考えておりますので、今後ともご指導をよろしくお願いいたします。

副校長になって

笠原 聡（神津）

多くの先輩副校長先生からご指導をいただいて、これまで、なんとか毎日の仕事をこなしてきました。朝、校内を巡回して異状がないか点検することから仕事が始まります。島なので出勤簿の押印で教員の出勤状況を確認します。全員での職員打ち合わせが終わった後で、校門に立って登校する生徒を迎えます。学校の目の前が海なので、強い海風にふかれながら生徒が登校してきます。生徒に朝のあいさつをするのが毎日の楽しみです。生徒数が少ないので、すぐに顔と名前が一致しました。同じ苗字の生徒が多いので下の名前で呼ぶということも島ならで

はです。

都内への出張があれば、前日の朝10時に学校を出ます。そして東京に着くのは夜になります。その日は船に乗るだけで一日が終わってしまいます。翌日出張を終えて夜10時の船に乗ります。船で1泊して翌朝に島に戻り、船を降りて、そのまま学校へ出勤します。一つの出張で2日間は学校を空けることになります。そのため、あらかじめ仕事の指示や段取りを組んでおかないと困ることになります。天候の関係で船が欠航することもあり、ある月の出張では予定通りに島へ戻れなかったこともありました。

本校では養護教諭がいないため、具合が悪い生徒や怪我等への対応は学校全体で行っていません。養護教諭の仕事については細かい点がよく分からないため、副校長としてとまどうことが多くありました。

神津高校は来年創立40周年を迎えます。今は、その周年行事に向けて準備を進めています。私はこれまでいくつかの学校で周年行事や開校式典に関わってきましたが、島で行うということで、これまでの経験だけではうまくいかないことや分からないこともあります。どうかこれからもいろいろご指導いただきますようお願い申し上げます。

早9か月

北江 繁治（大島海洋国際）

現任校の内示を受けたとき、副校長の職務の大変さより家族や生活面のことを考えました。1日でも早く大島へ行き、学校や教職員住宅を確認したい思いでした。前任者がオーストラリア語学研修引率のため、大島で引継ぎをしたのが3月30日でした。住宅も見せてもらい、生活に必要なものや譲ってもらえるものを確認しました。帰り際、校長からのお言葉「ひとつお願いがある。遅くまで仕事をしないこと。」には、着任以来甘え続けています。発送から日のない中でも、運よく荷物は4月1日の夜に配達され、初日から住宅で眠ることができました。

大島町の人には普通でも、私の感覚では暴風続きの4月の新年度・新生活が始まりました。すぐに、始業式・入学式と校舎は大島在住の生

徒や都内から帰舎した生徒の活気に満ちていきました。授業や部活動などは都内の学校以上に特色があり、私の教職経験もここに極まったと感じたほどです。

本校は、都立高校唯一の寄宿舎を持つ学校です。教員は学校勤務に加えて、舎監業務にも従事します。勤務時間の管理や寄宿舎への出張命令・振替などは、都内の学校では経験できないことです。また、私自身を含めた教員の出張は地内・地外に加えて海外もあります。旅行命令の起案や中部学校経営支援センターへの提出も、4月から全開状態でした。

本校独自の教育内容は、大島丸に乗船しての航海学習です。年9回の航海学習では、乗船式・下船式があります。大島に居れば何をおいても参列し、校長の代理であいさつすることもあります。生徒・乗船教員・船員の苦労に敬意を表し、全員の航海安全を祈念するためです。

私自身も5月に、2年生とともに韓国・釜山へ行きました。船酔いしながら船の仕事をする姿や上陸して国際交流・異国の料理を楽しむ様子を見ると、本校ならではの青春の姿があると感じました。9日間も学校を空けると、未決の書類や未読のメールがどれほどたまるか痛いほど分かりました。経営企画室担当者とは「多かったね」などと声掛け合っています。

経営企画室の朝の打合せには毎回出席し、職員室打合せの内容や副校長としての連絡をしています。経営企画室とのコミュニケーションも円滑です。昼食は経営企画室で注文してもらいます。野菜不足解消から毎日同じメニューにしていたため、注文表にはあらかじめ「野菜炒め」と印刷してくれました。

日常的な業務では、教員に対してはその場での対応を心がけています。副校長室を撤去するなど風通しもよくなりました。よく言われる地域連携では、仕事や交流事業が向こうからどんどんやってくるため、こちらからも案内を持って島内を回ります。広報活動では中学生・保護者に3つの覚悟を求めることも大事な仕事です。寄宿舎・船・後戻り（転学）しづらい国際学科ということ承知して入学する覚悟です。生徒が納得して学校生活・寄宿舎生活を送り、本校での3年間を全うしてもらうためです。

早9か月です。住宅から徒歩2分の通勤や午

後6時40分には退勤する生活も確立してきました。閉店の7時前に大島や近海の美味しい魚を買って、食生活を楽しんでいます。これからも、校長・舎監長（寄宿舎勤務の副校長）はじめ教職員と協力して、「生徒が誇れる学校づくり」に微力ながらまい進していきます。

都立中高一貫教育校に着任して

柳澤 忠男（桜修館中等）

今年度4月に副校長に昇任し、桜修館中等教育学校に着任した。中学校籍の私が都立学校の副校長として赴任することは異例なことであろうと思う。事実4年前に両国高校附属中学校の開設準備にかかわっていた時、当時の校長、副校長からは教員については将来的には高校籍で固めていく構想であるということを知っていた。都立高校改革で多くの学校が再編されていく中、「高校籍教員の働く場が狭まってしまうことを考えると当然かもしれない。」と開設準備室の同僚と話し、納得していたものだった。そんな中での開設5年目を迎えた桜修館への着任辞令は私にとって大変驚かされる出来事であった。

本校は公募で教員を採用する学校であり、中高一貫教育校で働いてみたいと考える教員が高校、中学両方から異動してくる。そのため、義務教育ではない高校と義務教育段階である中学の文化の違いは大きく、それを接続して1つの学校にした中等教育学校では生徒指導1つにしてもさまざまな意見があり、共通理解を図っていく必要がある。また、他の中高一貫教育校の多くが母体校の校名を受け継いでいるのに対し、本校は母体校の都立大学附属高校の名前を変え、別の学校として出発しているため、母体校の制度との整合性も考えつつ、新しい取り組みを一からつくっていく必要がある。毎年異動者が入ってくる中で、どう学校のコンセプトを伝え、ブレのない基本方針を貫いていくかという難しさがある。

しかし反面、今までにない新しい学校をつくっていく楽しみがある。さらに、学校現場には近くに生徒がいて、反応や成果がすぐに見える。取り組んだことの手応えがすぐに感じられる喜

びは何よりである。今後、困難な状況に直面した時も生徒の明るい表情を支えに、物事を前向きに考えて職務に当たっていこうと思う。

また、私がこの学校に配属された使命の1つとして、前期課程生（中学生）に対する指導や前期課程（中学校）の教育課程編成等について提言していくことがあげられる。学習指導要領の改訂等、教育の変革期に当たり中高一貫教育校が都民の期待に応えられる魅力ある学校となるよう力を尽くしていきたい。

さて、都立学校の副校長会は、私の前任の区市教委での副校長会から見ると規模も大きく、なかなか一人ひとりの先生方とふれあう機会も少ない。定時制、専門学科、進学重点校等、さまざまな形態の学校があり、校内事情もさまざまである。何か月か連絡会等に出させていたでいて、同じような形態の学校同士で情報交換ができる機会がもっとあれば心強いと感じた。経験豊富な諸先輩方にご指導いただき、一日も早く学校を支えられる副校長になりたいと思う。

副校長になって

菅 勇真（大島）

平成22年4月15日午前、都庁にて辞令交付、同日午後、ジェット船にて大島岡田港到着、そのまま大島高校に向かうというあわただしい赴任から9か月が過ぎました。着任時、大島に上陸するまで、大島は二度目の赴任となるので「何とかなるだろう」と考えていました。しかし、職員室で高木校長先生から副校長として紹介された私は、その瞬間、頭の中が真っ白になり、すっかり動揺して挨拶も満足にできませんでした。その姿は、教職員の皆さんに、何と頼りない副校長だろうと先行きの不安をかきたてるのに十分であったと推測されます。案の定、あの副校長に任せていたのでは心配だ、自分たちで何とかしなければいけない、という雰囲気が職場に広がりました。教職員の皆さんは、私が何も言わなくても、自らの役割を理解し、校務を円滑に進めてくれています。その心ある教職員の皆さんの優しさに私は救われますし、感謝もしています。同時にその先生方の心が大島高校をして、生徒が明るく元気に生活できる学校に、

教職員が健康で笑みを絶やさない学校にしていけるよう、私が力を尽すべきなのだと思い思いを抱きました。

大島高校は、中学生からは「憧れを持ち入学したい学校」、保護者からは「入学させたい学校、入学してよかったと思える学校」、地域からは「応援したい学校」を目指しています。そのためには、学ぶ喜びを感じることができる楽しい授業、活動が活発なだけでなく成果も上がる部活動、参加してみたいと思える魅力ある行事、などを築いていくことが大切であると私自身は考えています。大島では、今後、小中学校に在籍する児童・生徒数の減少が予想されます。これは大島高校の入学者数が確実に減少することを意味します。その影響を真っ先に受けるのが部活動です。結果を残してきた野球部や女子バレーボール部などの伝統ある部活動さえも、部員数不足で大会参加が不可能ということになります。部活動以外にも、授業そのものだけでなく、学校行事などの教育活動全般、ボランティア活動等の地域への貢献などのあらゆる面で、この生徒数減少が影響します。生徒数の減少は大島高校の存立そのものにかかわる大きな問題です。

この危機的状況に臨み、大島をこよなく愛し、大島高校の発展を誰よりも一番強く望む校長高木先生とともに歩めることに、私は今大きな喜びを感じています。本校の希望の星となる生徒をどのように育てるのか、また、教職員の力を本校の発展にどのように結びつけるのか、副校長としての私の責務は決して軽くはありません。しかし、その重みに負けることなく、与えられる試練をよき経験と思い、大島高校のますますの発展を目指して、組織として取り組むべきことを一つ一つ堅実にこなしていきたいと思っています。そのためには、まず健康であること、そして笑顔を絶やさないこと、大島を誰よりも愛すること、だと思っています。

感謝の日々

杉浦 文俊（北園）

平成22年4月に都立北園高等学校に副校長として着任いたしました。

管理職候補者のジョブローテーションで5年間教育行政におりましたので、内示を頂いたときには、久しぶりの学校現場に戻ることに、期待と不安が入り混じったものでした。

前日の夜遅くまで、本庁で引継ぎの書類を作成していましたので、正直言って4月1日の朝、「今日から副校長だ」という実感も薄く、まだ誰もいない職員室の副校長席に座り、目の前の決済箱にある休暇簿の「決定権者」の欄に印鑑を押すときになって初めて、その責任の重さを実感し、身が引き締まる思いでした。

企画調整会議では、その構成メンバーの中で副校長が一番年下であり、全校集会で紹介があったにせよ、校内を歩いているときでも生徒から「先生は何を教える先生なんですか」と聞かれることや、1,2年の校外行事に引率にいけば、「旅行会社の添乗員」と勘違いさせるようなそんなことが、5月まで続きました。

年度当初の副校長の仕事は忙しいとは、聞いていましたが、本当に色々なことを処理していかななくてはならないときに、頼りになったのは、本校の7名の主幹の先生方でした。年下にも係わらず「副校長さん、副校長さん」とさりげなくフォローをしてもらい（今も続いています）、本当に感謝、感謝です。

年度の当初は、自席でコーヒーを飲む余裕がありませんでしたが、夏ごろから、若干の余裕が出てくると、耳に心地よく響くのは、生徒たちの声でした。授業観察で教室に行くと「副校長先生こっちに座りなよ」と声をかけてもらえるようになり、改めて学校現場のよさを実感しています。

こんな頼りない副校長として、スタートしまして10か月目を迎えますが、ここまで、何とか職務を遂行できたのも、校長を始め教職員のスタッフ、PTAや地域の方からの支えがあったからです。また、月1回の副校長連絡会では、先輩の先生方から色々と教えて頂くことが多く、多くの方々に本当に日々感謝の気持ちでいっぱいです。この気持ちを忘れずにこれからも北園高校の発展に寄与していきたいと思えます。

どうぞ御指導頂けますようよろしくお願いいたします。

副校長に昇任して思うこと

生田 武美（王子総合）

平成22年4月北地区総合学科高校開設担当副校長、10月14日に正式名称が都議会で認められ王子総合高校副校長に任ぜられました。

思えば、管理職候補になった19年4月はそのまま現任校にとどまり、周りの教員からは「いつから副校長になるのか？」という声をかけられ私もいつ昇任するのか気になっていました。

管理職候補の2年目の20年4月、この年は主幹として「教務部」を初めて任され、入選や教育課程・成績処理・補欠募集・年間行事計画など教員生活の中で初めての教務部を経験しました。それまでは担任か生活指導部・部活動しか経験していなかった私にはわからないことがいくつもありましたが、幸いにしてそんな素人教務主任に当時の教務部の先生方は非常に協力的で大変助かったことを思い出します。

管理職候補3年目の21年4月は北地区総合学科高校開設準備室に主幹教諭として配属が決まり、副校長に昇任する覚悟でいた私にとっては複雑な気持ちで飛鳥高校の一室に通うことになりました。この1年間、副校長がいない開設準備室の中で校長先生は副校長の業務も兼務しながら私に管理職候補として必要な知識や業務を実践的にご指導してくださいました。

そして管候補になって4年目の22年4月、副校長として昇任しました。

実際に副校長の職務として、『校長を助け、校務を整理し』とあるように、校長の学校経営を理解し、その実現に向け方策を考え、実行しなくてははいけません。特に学校改革推進計画の中で新しく開校する本校の役割には、都教育委員会をはじめ地元からも大きな期待がもたれています。

学校を創るにあたり、『北地区総合学科高校基本計画検討委員会報告書』をもとに、校章・校歌をはじめ新しい教育課程を編成していきます。

王子総合高校は、私が経験してきた普通科高校とは違い、多様な生徒を受け入れその個人の持っている能力に気付かせ将来の進路選択能力を伸ばしていく学校です。そのため多くの選択科目や実習授業を設置し、本校の特徴を創りだしていくという創造力と実行力が必要とされて

います。現在教員5名で準備を進めていますがそれぞれ自分の経験をもとに今までの学校のやり方を続けようとしてしまいます。しかし、学校改革を進める本校としては、今までの発想にとらわれない学校づくりを目指しています。副校長として『学校改革』のもと校長の学校経営を教員に徹底させることには苦勞します。

朝は早く、夜も遅くなってしまいますが体力では負けられません。サービス管理、教員の指導育成、溜まっていく資料の数々、学校経営に関する校務等さまざまなことで自分の能力を超えた仕事が求められています。しかし、自分で決断した副校長への思いを実践し、教員になった時の初心を忘れずに日々の学校生活を充実させていきたいとこの原稿を作成するにあたって決意を新たにしたところです。

校長先生や18Bの仲間、管理職の先輩や指導主事の皆様そして家族に支えられながら、平成23年4月開校に向け副校長として周囲の期待に応えられるように校長・教職員とともに努力をしていきたいと考えます。どうぞ今後もご指導ご鞭撻の程よろしくお願い致します。

新米副校長悪戦苦闘奮闘記

高橋 秀信（武蔵丘）

「副校長！」と呼ばれても、ぴんと来なかった4月から、もうすぐ1年になろうとしています。情けないことに、仕事に振り回される毎日です。「倒れてたまるか！」学校から駅への道すがら、毎日呪文のように唱えています。大学時代の柔道部の練習に比べればどうということはない。自分にそう言い聞かせながら、夜のホームでドーナツを2個食べる日々が続いた1、2学期でした。

TAIMS パソコンの電源をいれ、コーヒーを飲む頃になると保護者からの電話対応や先生方の年休の処理などで、あっという間に時間が過ぎます。校長は昇降口で生徒の登校指導。「俺も行きたいな。以前は毎朝正門で生徒をからかったり、怒鳴ったり・・・」どうしてこんなに自分のペースがつかめないのだろうと自問自答の毎日です。常に人のペースで動く毎日。散々わがまま言って人に迷惑かけた分、仕方ないか、

と自分を納得させます。とにかく困っているのは TAIMS パソコンに入ってくる膨大な量の調査です。これは異常です。「もっと現場の状況を考えてくれ」という愚痴は心の中にしまって、今日も「締め切り過ぎてる！」。何でこんなに要領悪いの？能力低すぎないか？この仕事向いてないんじゃない？もう一人の自分がささやいています。

「ちゃんとハンコ押してくれ。記入漏れあるぞ」、「部活動の届けは事前申請だぞ」、「振り休簿の記入の仕方が違う。ちゃんと説明したろー」、「書類の提出メ切守れー」、「何のんびりこいてんだ。もっと急いでくれ」、「タイムスなんかいらないよ」、「昼飯ぐらいゆっくり食わせろ」、「何でこんなに調査ばっか？見落とすでしょ。当然でしょ」「あー、この調査締め切り過ぎてる。やばい。催促のメール来てる」、「飲みに行きてー」、「鮎釣り行きてー」、「眠い、思い切り寝たい」、「生徒と絡みたーい」「子供と遊びたあーい」・・・いつまでたっても要領が悪く、仕事が遅い私の頭の中ではいつもこんな言葉が飛び交っているのです。

本校の課題は、学力の向上と進学実績を回復させ、中堅上位の進学校としての地位を確立することです。全人教育の推進を掲げ、学力、生活、進路、部活動、学校行事などあらゆる面でこ入れを行い、新しい取り組みを行ってきました。朝学習、自学自習ガイダンスなどは今年度から新しく始めた取り組みです。今年度、学力向上開拓推進校に指定され、生徒の学力分析をもとに学力を向上させるため、入試の分析と2回の学力調査を実施しました。様々な課題はありますが、校長を軸とした推進体制が評価され、来年度からの重点支援校に指定されました。また、カリキュラムの改定を行う中で、4月からの隔週土曜授業の実施も確定しました。武蔵丘は今、大きく変わろうとしています。大きな枠組は整いました。今後は、その中身をどう充実させていくかが問われます。課題山積ですが、やりがいのある仕事です。

「夜明けの来ない夜はない」・・・いい言葉だなと思います。そう思える影には先生方の協力があります。遅くまで一緒に仕事をしていると、校長のサポートと同時に、貴重な人材を育成するという責任の重さをひしひしと感じます。今

は校長頼りですが、校長が安心して留守に出来る学校にしなくてははいけません。

最近心の中で唱える言葉は「今に見てろ。もうじき『俺の学校』にしてやるぜ！」に変わりました。

副校長になって

渡邊 隆（練馬工業）

早いもので、4月に都立練馬工業高校に副校長として着任し、あっという間に10か月が経ちました。学校に来る毎日が新鮮で、慌ただしくも充実した日々を送っています。最初のころは、挨拶をし通り過ぎると、「今の誰」と言われる声が聞こえて寂しい思いもしましたが、授業参観や部活動を見学したり、様々な学校行事等で交流を図ることで、話しかけてくれる生徒も増えてきて、うれしい日々となっています。また、学期に1回、朝礼で講話をするという貴重な機会を設定していただいています。生徒たちの期待に応えられるよう、唯一の授業であると思い、必ず原稿にまとめて講話に臨んでいます。話の後、「副校長、今日の話、良かったよ」と声を掛けてもらい、嬉しくなるとともに、勇気づけられています。

私は、大学を卒業して、「地に爪あとを残す、人のためになる仕事として土木技術者を志望」し、建設会社に就職しました。エンジニアとして、様々な公共事業に携われたこと、後世に残る構造物を多くの人と協力して造った喜び、たくさんの人に出会えたことは、誇りであり、貴重な財産となっています。そして、民間企業に17年間勤めてから教員となり、指導主事・学校経営支援主事として教育行政にも4年間携わることができました。今までの経験を生かして、エンカレッジスクールとして5年目、第二ステージを迎えた本校の教育活動の一層の充実・発展に努めています。

本校に着任してから、予期せぬ事態が続いても、校長先生、副校長先生（二人副校長）をはじめ、多くの先生方や経営企画室の方々に助けられています。毎日行っている朝の綿密な打合せでは、管理職と経営企画室長で情報を共有しています。また、工業高校で唯一のエンカレッ

ジスクールとして、生徒が入学して良かったと思える学校づくりに向けて、様々な教育活動を行っています。先生方も、多様な生徒に対し、個に応じた指導、繰り返しの指導を粘り強く行っています。毎日遅くまで、生徒のための教材づくりなどに取り組んでいる姿や、何事にも全員体制で臨んでいる姿勢には感心しています。教職員一丸となっていることで、生徒も、着実に成長しているという実感があります。

副校長として、日々の業務に追われながらも、本校のこれまでの成果と課題の検証に取り組むことで、責任の重さを痛感しながらも、とてもやりがいのある仕事であることを再認識しています。これからも、教職員とのコミュニケーションを大切にし、生徒のやる気を励まし、可能性を引き出して伸ばし、将来の夢や希望を実現する学校づくりのために、全力を注いでいきたい。

今後ともよろしく願いいたします。

副校長に昇任して

武田 一郎（第四商業）

副校長に昇任して数か月が経ちました。あわただしくも、自分の中では、充実したこの期間でした。

平成22年度、4月当初の昇任はなく、この一年教務主幹として来年度の昇任に向けての準備期間とすべく、どちらかと言えば今までどおりの教員生活で特に気が張り詰めたものではありませんでした。

そして、体育祭を控え、6月の授業公開に向けて準備を進めていたところ校長室に呼ばれ、昇任の連絡をいただきました。

着任までは2週間あまり、前任校の整理と引き継ぎ等に追われて、着任準備などはまったくできず、その日を迎えることになってしまいました。特に、後任の教務主任を任されてしまった先生には大変なご迷惑をおかけすることになってしまいました。

6月16日着任校では、着任したその日に職員会議があり、先生方への紹介もありましたが、職員会議の司会も行い、翌週からは、授業観察があり、授業公開週間が始まり、副校長として

のルーティンワークが何やら考える間もなく時間に追われる毎日でした。

当たり前の話ですが、当初は先生方の顔と名前が一致せず、相談しようにもどこへ行って、誰と相談すればよいか、難しい日々がありました。しかし、2週間もすると期末考査が始まり、先生方の動きもひと段落して、コミュニケーションを図るチャンスと見て積極的に声がけを始めました。どんな些細なことでも話題に取り上げ会話を持つ努力をしました。また、どんなに忙しいときでも、校長室に呼ばれたその移動途中でも手を止め、足を止め、話を聞くようにしてきました。副校長としての仕事は半人前でもこの先生方の話を聞く姿勢は常に持っていたいと思っています。

校長先生の考えをいち早く適確に察して教員に周知し、学校経営計画の具現化に取り組むためにもこのような先生方とのコミュニケーションを図るということを大事にしていきたいと思っています。

ただ、コミュニケーションを図ったからといって何事も仕事がスムーズに進むとは限らず、なかなか難しいところでもあります。

また、先生方だけでなく、地域や保護者とも連携を図らなければ学校の目指す教育活動には結びつきにくいものになってしまうと思います。

何事も言うは易し、行うは難し。

その第一歩として、先生方と常にコミュニケーションを図り、問題意識を共有して教育成果を期待して、期待できれば先生方もやる気になってもらえると思っていて頑張りたいと思っています。

副校長に昇任して

高野 宏 (永山)

副校長に昇任して、はや9か月が経過しました。着任以来、校内外では様々な出来事があり、対応に追われる毎日でした。臨機応変の判断が求められる案件を綱渡りの心境で乗り切り、膨大なルーティンワークに押しつぶされそうになりながらも、教職員の協力に支えられ、何とか今日にいたっています。

また、新補の副校長といえども学校経営上必要とされる能力は経験豊富な副校長と変わりは

なく、足りない部分は、校長先生の指導を仰ぐとともに、5人の主幹教諭に意見を求めることで補っています。

本校は、若手教員の多い職場で、採用4年目までの教員が12名おり、校務や保護者対応等、様々なことについて私のところに相談にきます。教育に対する彼らの真摯な姿を見ていると、自分も初任者時代の気持ちがよみがえり、新たな気持ちで仕事に取り組むことができます。自分も諸先輩方に育てられたことを思い出し、微力ながら後輩たちに経験を伝え、育てていきたいと思っています。最近、ベテラン教員も報告・相談にくるようになり、勤務時間中になかなか自分の仕事ができないことが悩みの種です。

本校は過去において、管理職と教員の間の連携がうまく取れなかった時代があり、学校運営は一部の教員が担っていました。このような経緯から、現在でも仕事の一部の教員に集中している状況があります。現在は、若手をはじめとして優秀な学校運営に協力的な教員が多いので、一部の教員に集中した仕事を分散して個々の力を発揮させ、それを、いかにして集団の力としてまとめていくかが課題と考えています。

また、職員の健康管理にも悩んでいます。非常に仕事熱心な教員が多く、夜8時過ぎまで残って翌日の教材準備をする教員、土日も休まず部活指導を行う教員など、生徒のため我が身を顧みず教育に取り組む先生方を見ると本当に頭が下がります。このような先生方が本校の教育を支えていることは間違いありませんが、先生方がいつか体を壊すのではないかとほらはらしています。いかに先生方に休みを取っていただくか、健康を害することなく本校の教育に力を発揮していただくかに留意しています。

忙しい毎日ですが、日々充実しています。教員がやりがいを感じて教育に取り組み、生徒が素質を開花させ、自己の可能性を広げられるような学校になるよう、副校長職を楽しんでいきたいと思っています。

新任副校長として

深澤 真澄 (八王子桑志)

着任初日、上野の東京文化会館で辞令の交付

を受け、昼食を取る間もなく学校へ向かった。学校に着くとすぐに新任教員のオリエンテーションが始まった。

着任の行事が一通り終わり、校長室での打合わせを終えて職員室の自席に着くと、春季休業中ということもあり未決箱から休暇・職免処理簿等のファイルや書類が山になって溢れていた。印漏れや、記入ミスを訂正してもらおうとするのだが先生方の名前と顔が一致しない。声をかけたくても広い校舎内にバラバラに散ってしまってなかなかつかまらない。覚悟はしていたものの処理に予想以上に手間取り、呆然とした。

何かをやろうとして動き出すたびに、ことごとく仕事が止まった。また先生方から矢継ぎ早に様々な質問や相談を受けるのだが即答できるものはほとんどなかった。幸いにも本校は二人副校長制のため、隣に行政系の副校長がいてくれたのは大変心強く何でも質問したが、それでもこの有様だった。初日の仕事を終えたとき1週間分以上の仕事をしたような気分だった。

着任当初は1週間が1月くらいに、1月が半年くらいに感じた。夏季休業に入る頃になってようやくペースがつかめ、本来の時間の感覚が戻ってきた。

1日のサイクルは、朝は5時に起床し、7時過ぎに学校に入る。夜は10時半に学校を出て自宅に着くのは午前0時過ぎという毎日が続いた。2学期以降帰宅時間は、やや早まったものの基本的にこのサイクルは変わっていない。

ハードではあるが産業科という特色ある学校で、生徒の成長と学校の発展のために充実した日々を送らせていただいている。また先にも述べたが、副校長1年目にして、行政系の副校長とペアを組ませていただいたことは色々な意味で貴重な経験となった。さらに来年度は民間出身の校長をお迎えすることが決まっており、民間出身の校長の下で仕事のできる良きチャンスを得たと思っっている。

何はともあれ、ここまで何とかやってくることができたのは本校の関係者はもとより、お世話になった西部学校経営支援センターの皆様、地区の校長先生方、先輩・同僚の副校長の皆様のお陰と感謝している。

来年度は「副校長としての視野」と「校内外のコミュニケーションの輪」をさらに広げて、

一人前の副校長として成長していきたいと思っている。

「皆様今後ともよろしく願いいたします。」

副校長に昇任して

鈴木 留美子（府中東）

平成22年4月1日、東京都立府中東高等学校の副校長に着任いたしました。

管理職候補としての1年目は、全く違う職業にトラバークしたかのような指導部高等学校教育指導課での日々でした。戸惑いながらも何とか慣れたと思った矢先、今度は、学校経営支援センターが開設するという立ち上げの時に西部学校経営支援センターに異動になりました。2年間、試行錯誤を重ねながらも、27校34課程を担当し、仕事は基本的には高指課の業務に近いものでしたが、高指課では経験できなかった、学校現場にとっても近い立場で学校を支援し、高指課業務とはまた違った総務部や人事部等の他部の業務も経験するという、非常に充実したそしてとても楽しい毎日を送らせていただいております。

ところが、3年目の終わりに、希望していなかった学校現場への主幹教諭としての転出という内示を受け、都立多摩高等学校へ異動しました。

多摩高校では、学校の教員時代ほとんど経験のなかった「教務」担当主幹教諭ということで、再び、戸惑いの毎日となりましたが、順応が早い得な性格ゆえ、あっという間に慣れ、しばらくぶりに吹奏楽部顧問として棒を振り（もちろん指揮棒です。竹刀ではありません）、かわいい(?)生徒たちと戯れながら、楽しい日々を送っております。しかし、支援センターでの生活が忘れられず、戻りたいと言い続けるうちに2年が経ち、昨年3月に、西部所の学校経営支援主事時代担当した府中東高校の副校長という内示をいただき、愛する生徒たちに別れを告げ、杉の花粉舞い飛ぶ青梅の地を後にいたしました。

府中東高校の副校長という内示は、正直言って驚きました。1学年8クラスの大規模校で、職員数も多く、初心者マークの副校長で務まるか不安でしたし、自分が学校経営支援主事時代

に学校訪問をすると、あの当時、かなり少なくなっていたいわゆる『やまんばギャル』がまだ見受けられ、生活指導に手がつけられていない学校というイメージが強かったからです。

しかし、赴任してみて、学校の雰囲気は全くイメージと違うのに驚きました。金や銀の髪の毛の生徒は全くおらず、茶色もごく少数という感じでしたし、大きな声で明るく元気にあいさつしてくれる生徒たちに、数年でこんなに変わるのかと感動すら覚えました。

まもなく、1年が終わろうとしています。

様々な課題を抱え、試行錯誤しながら、何とかやってこられました。

周囲の先輩副校長先生や学校経営支援センターの方々に助言や励ましをいただき、支えていただいたおかげでやっと1年が過ぎせた感じがします。

『明るく楽しく元気に』をモットーに、これからも頑張っていく所存です。今後とも、ご指導ご鞭撻の程お願いいたします。

副校長になってからのつぶやき

杉本 悦郎（武蔵附属中）

・武蔵とは

母体校の都立武蔵高等学校は府立第十三高等女学校の設置から数えて創立70周年を迎えた伝統校です。また、着任した附属中学校は平成20年度に中高一貫教育校として開校した3年目の学校です。中高一貫としての武蔵の完成にはまだ3年かかります。

・同じ中高一貫校でも

平成16年度の1年間、東京都教職員研修センターにおいて、教員研究生として「中高一貫教育校における教養教育に関する研究」を主題とした研究に参加しました。また、翌年度から都立桜修館中等教育学校の開設準備室と開校からの3年間を勤務しました。しかし、母体校である武蔵と都立大学附属とは学校の伝統や体制も違い、同じ中高一貫教育校でも併設型と中等教育学校との違いなど、勝手が違い戸惑いの毎日でした。ちなみに6年間入れ替わりのない中等教育学校では適性検査（1000名前後の応募があり、以前は二つの会場で検査をやっていた）

を1回実施しますが、高校からも生徒募集のある併設型では適性検査の他に推薦と自校作成の学力検査があります。特殊な入選業務が多く結構気を使います。

・中学生と高校生は全く別のも

中学生と高校生は似て非なる生態をもっています。どこにでも何か疲れたような様子で座っているイメージのある高校生とは対照的に時間があればかけっこをしている元気な中学生。授業中でも自分の意見を聞いてほしくてしょうがない様子。これも発達段階の違いの一つなのでしょう。

・二人の副校長で

武蔵では校長は中高の両校を兼務し、副校長は中学校と高等学校にそれぞれ一人ずつ配置されています。二人の副校長がお互いに他方の学校を兼務しているため経験の無い私にとって大変心強いです。その上、高等学校の副校長が全国高等学校教頭・副校長会会長というベテランということもあり、疑問点に対して常に適切なアドバイスを受けることができ、毎日がOJTです。

・生活が大きく変化

副校長と教諭の職の違いについては研修等を通じて分かったつもりになっていましたが、実際にその立場に立ってみると全く違うことに困惑しました。日々の授業や部活動の指導、夏の合宿や冬のスキー教室の引率などこれまでの教員生活で繰り返してきた仕事と全く別の副校長の職務へと変わり、生徒との距離がいきなり広がったような喪失感に似た空虚な感覚がなかなか消えません。皆さんはいかがだったのでしょうか。

・今後は

中高一貫教育校の中学校の校務というのは区市立中学校のものとも都立高校のものとも異なります。また、新しく作って行かなくてはいけないものがまだまだたくさんあり、入選・教育課程・生徒指導・キャリア教育など、分掌間や学年との校務分担についても課題があります。今後は校務を整理することなどで、先生方が生徒と関わる時間が少しでも確保できるように努めていきたいと考えています。

副校長になって

木田 貴子（田無）

田無高校の副校長として着任してから9か月が過ぎようとしています。この間を表現するとしたら、長かったような、あつという間のようなという言葉がしっくりくる感じでしょうか。

4月1日の午前2時、前の職場での残務整理をようやく終え、帰宅。ほんの少しだけ横になり気分を新たに、田無高校に向かいました。

学校に着くと、たくさんの生徒が明るい声で「おはようございます。」とあいさつしてくれました。この声を聞いた瞬間、新しい環境への不安が一気に吹き飛んでいました。今でも、毎日、生徒たちのあいさつに勇気付けられています。

着任して2日目、生徒が登校中に盗撮被害に遭いました。本人のみならず、警察や保護者への対応はもちろんのこと、支援センターへの連絡、教員への周知、登校している生徒への注意喚起などの確な判断をして行動しなければならない場面がいきなり起こったのです。「あせらず、あわてず、迅速、正確に」と頭では分かっているのですが、いざ行動するとなるととても難しいということを実感した出来事でした。同時に、後日、事故報告を提出するに当たり、時間の記録を正確にしておくことの大切さも学びました。

経験から学ぶことも多い毎日ですが、日々の仕事で役に立っているのが、指導部高等学校教育指導課の「副校長実務必携」です。月のはじめには「学校運営のカレンダー」で1か月の流れを確認し、サービス管理、研修についてなど、解らないことがあるとすぐにページをめくって参考にしています。また、着任した際、校長から、「実務必携の根拠文書に当たっておいたほうがいいですよ」と言われました。10cmのファイル2冊分くらいあるので、とりあえず斜め読みしてインデックスを付けておきました。ある日、教員から、生徒の休学の取扱いについて相談されたとき、すぐに根拠書類を提示して答えたところ、「これなら保護者と話すとき、説得力があります。助かりました。」と言われました。「ああ、こういうことだったのだ。」と改めて実務必携と根拠の大切さを知りました。

最後になりますが、ここまでこられたのは、校長先生はじめ、田無高校の教職員の支えのお

かけだと思えます。とても感謝しています。

副校長になって

早川 信一（多摩科学技術）

平成22年4月、多摩科学技術高校の副校長として着任した。着任の2日前まで部活動の発表大会に参加していたこともあり、副校長としての仕事の準備、意識をする間もなくその日を迎えた。

本校は、都立高校では2校目の科学技術高校で、4月に開校した。学校の全ての活動は新しく展開されるものであり、学校のシステムも確実に定まった状態ではないが、この時全てが動き出した。

正直なところ、この頃は新しい学校をどう動かすかを考えるより、人、予算、新校舎、情報の整理と調整などの事務作業に追われ、日々それらを何とかこなすだけといった状態であった。スタートした新しい学校へ着任したという新鮮さを感じる余裕は全くなかった。

当然、現状は何かにつけ現在進行形の状態であり、多くのことが手探りの状態であった。ただ先生方は「副校長なら全てわかっているはず」とでも考えているのか、「とりあえず全てを副校長に聞きに来る」という状況であったように思う。今でも全ては応えられていない。

本校は、小金井工業高校の旧校舎からのスタートであるが、新校舎への準備は予想以上に忙しい。着任当日から、始めて見る新校舎の図面を何枚も広げた。各階・各教室、専門教科の実験室、特別装置と施設設備の状況の確認などにも余念がない。その後、事務担当者と先生方の要望を聞き取り、担当各署へ説明に出かけ、毎週1回の新校舎現場会議に出席している。その作業も現在最終段階に入った。そして、いよいよ今年の7月に新校舎への引っ越しが待っている。その他、初度調弁・教材の調整、開校式典の準備など、新設校ならではの独特の業務が常に待っている。

また、小金井工業高校定時制と校舎を共有しているため、両校の調整も欠かせない。学校のスタンスが全く異なる二つの学校が同居している状態であるため、毎週行う2校連絡会は重要

で、新校舎への移動後の学校経営についても詳細な調整が必要になる。

新設校とはいえ、普通の一つの学校として休むことなく毎日が過ぎていく。新たな学校づくりと同時に、当然副校長としての通常業務があり、あまりの仕事量に副校長の忙しさを改めて実感している。

最近やっと頭で考え、行動できるようになってきたように思う。生徒が満足でき、自慢できる多摩科技をつくるという先生方の目標は同じである。そのために学校をどのように動かし、先生方の力を最大限に引き出せるか、それを考えるのが私の仕事であろう。

このように慌ただしい10か月であり、まだ後ろを振り返る時間はない。しかし、ここまで何とか仕事が進められてきたのも校長先生をはじめ、ともに着任してきた先生方のおかげであると感謝している。

副校長として私自身が未熟なことは承知している。先生方の「とりあえず副校長に聞いてみよう」に少しでも応えられるよう頑張りたい。

地に足をつけて

清水 真（東大和）

4月1日、東大和高校に着任した。それまでの1年間は、総務部主幹として、学校経営を少しでも補佐できるようにと動いてきた。副校長としての視点を考えながら過ごしてきたつもりであったが、実際に着任してみると、毎日が新体験であった。東大和高校は校長・副校長とも前任者がそろって退職されたため、そろって新任という状況であった。

毎日、自分が何をやっているのかわからないうちに一日が終わっていった。自分が自信を持つてできることは、教員の顔と名前を覚えることぐらいしかなかった。業務と格闘しつつ、教員の特徴を探し続けた。右も左もわからないうちに最初の一週間が終わった。そしてすぐに入学式。入学式では、教員の座席が特定されている。そこで最終的に覚えることができた。

東大和高校の特色は、部活動が盛んなことである。ゴールデンウィークの頃は、運動部の大会がたくさんある。自分自身が体育の教員とい

うこともあり、様々な種目の大会に足を運んだ。陸上部、男子バレーボール部、男子ハンドボール部が関東大会に駒を進めた。自分と同じく、体育出身である校長と手分けして応援にまわった。日常業務のハードさを忘れて応援できる楽しいひとときであった。

6月になり、さらに状況が変わった。男子ハンドボール部が高校総体で躍進し、都立高校としては37年ぶりに全国高校総体に東京都代表として出場することとなった。陸上部も出場を決めており、ふたつの種目が出場することになった。大変なことになった。自分は、選手としても引率者としても未経験のことである。しかも、開催地は沖縄である。いきなり問題が浮上した。特に大きいのは資金問題。沖縄は交通の問題があり、自由に帰ってくるできない。最低でも7泊を考えなければならない。校長の指導のもと、各方面に資金調達のために動き回った。そんなことをしているうちに、沖縄高校総体が終わった。

そして、次の課題が始まった。11月に創立40周年行事がある。4月の着任早々から記念誌については作業を続けており、8月には初稿があがった。同時に記念式典の準備が本格化した。招待状の発送から始まり、行事の進行や内容に作業は進んでいった。緊張をとまなう儀式的行事であり、なかなか進まない。実施要綱を作っては直し、ということが繰り返された。

11月、記念式典が終了した。ここまでの8か月、まったく地に足がつかない毎日であった。その後、2か月が経過した。やっと回りを見ながらの生活が始まった。自分なりに自分の役割を考えることができてきた。自分は学校の潤滑油であると考えている。

- 1 校長の意を汲み、全体に浸透させる。
- 2 教員の状況を把握して校長に報告する。
- 3 生徒の状況を把握して校長に報告する。
- 4 PTAと学校間の潤滑油。
- 5 同窓会と学校間の潤滑油。

まだまだ、できないことが多く、校長に助けってもらってばかりである。特に、TAIMSの端末を見て、必要情報をつかむのが苦手である。現在の取り組みの場、東大和高校で精一杯教育活動に貢献していきたいと考えている。

自然の中の多摩高校

西野 良仁 (多摩)

1月は青梅駅から朝日を背に山に向かって通勤している。山肌を照らし出す朝日が美しい。家を出るときはまだ真っ暗な世界。電車の中で、白白と明けていく絶妙なコントラストを楽しむ。拝島からは下りの電車になるので乗客は少ない。上りのホームに列を成している人々を眺めながらの出勤である。電車の窓から見える多摩の山並み、秋川、秋留台地、多摩川、季節の移り変わりがはっきりわかるこの通勤経路を私は気に入っている。都心から約2時間、バーベキューや川遊びに来るような自然環境の中に多摩高校は立っている。経度でいえば五日市高校のほうが少し西にあるが、多摩高校が東京の西のはずれにあることに変わりはない。

4月に多摩高校に着任して早10か月が過ぎようとしている。この10か月、私にとってはあつという間の出来事だった。とにかく目の前の仕事をこなすのに精一杯で、立ち止まって考える余裕がなかった。学校経営計画を具現化するためにしっかりした実行プランを立てたい、そのため教員と打ち合わせをしたいと思っはいても、時間だけが過ぎていってしまう。校長先生からは、まず緊急性のあるものから対処しなさいと指導を受けた。副校長として、すべてをこなすことは難しいと実感した。

指導主事や支援主事はよく「ルーチンワークには慣れましたか。」と聞く。私は10か月たった今もまだ慣れていない。4月の自己申告書の電子化、9月の旅費システムと次々と新しいシステムが導入される。でも、使いこなせるようになれば仕事が楽になるはずだと言いつつも聞き取れずにいる。現在、困っているのが旅費システムの差し戻しである。メモは取っているものの(パソコンで処理しているのにメモを取るのはおかしいと思いつつ)いつの出張を誰にどのような理由で差し戻したのか、私自身が忘れてしまう。TAIMS上で確認すればよいのだが、開いてみないと内容がわからない。再送信されないとそのままになっていたりもする。さらに、TAIMSの未読メールがどんどん溜まっていく。そんなときは、職員室の窓から外を見る。副校長席の左側にちょうど窓がある。窓から見える

青梅丘陵とそれに沿って走る青梅線。ストレスの解消には、これがいいようだ。

校長先生を始め、先生方、経営企画室職員の方々に暖かく迎えていただき、何とかここまでやってこられた。最近では西部学校経営支援センター支所への相談電話の常連になっている。支援主事や職員の方々に毎回丁寧に対応していただき、大変感謝している。皆さんに支えられているということを強く感じ、何とか多摩高校の役に立ちたいという思いでいっぱいである。校長先生の学校経営計画を具現化しながら一步一步、多摩高校を魅力的な学校に近づけていきたい。

顔を上げて

村山 正仁 (福生)

文字通り、「顔を上げて」を心がけています。先生方が、私に声をかけるときに、必ずといってよいほど、「お仕事中に・・・」「お忙しいところ・・・」といった枕詞がきます。全くその通り、手を休める暇が無いのが現状です。私は、職員室にいるとき、殆どの時間「顔を下げ」て書類に目を通し、PCに向かって書類を書いています。先生方が私に話しかけるときに、もっと気楽に話しかけられるようにしなければと思っています。

4月1日、新任副校長となって、ようやく1日が終わろうとしていました。まずは順調な滑り出しと思ったとき、育休代替の先生から、「中学校から採用通知が来ました、辞めます。」と突然言われました。昇任直前研修の演習に臨時的任用教員が休職した場合には、という問題があったなと思い出しました。その時には、こんなことがあるのかと思っていましたが、何があってもおかしくないのだと思い知らされました。とにかく、授業に支障が出ることはなんとしても避けたいと、始業式までに、せめて授業開始に間に合うようにと、一週間の間、無我夢中でした。校長先生、企画室長の力添えを得て、何とか代替教員の手配が出来、授業の開始に間に合いました。これが学校を支えていく管理職の役割と自覚しました。

その後も毎日、様々な調査や報告との格闘で

す。気づけば、回答期限が明日に迫っている、調査の回答の元になる資料を探し、誰にお願いすればよい物なのかを探り、机に向かい忙しくすごして毎日が過ぎてしまいますが、校内を回ると、生徒たちの生き生きとした姿、指導をする先生方の元気な姿が飛び込んできます。何とか時間を作り、その機会を増したいと願っています。生徒や先生たちにもっと元気になってもらうにはどうしたら良いか、何が出来るかを考え、実践していく管理職になれればと思っています。

最近、ようやく「顔を上げて」いる時間が増えてきました。仕事の多さと不慣れのせいで、まだまだ「顔を上げて」いる時間は短いまです。先生方から話しかけられるとき、今も同じに枕詞がつきます。せめて忙しくない振りをしてでも、枕詞をなくし、気楽に話しかけてもらえる、そればかりでなく、自分から積極的に話しかけ働きかける副校長でありたいと思っています。

副校長としての10か月

西島 宏和（秋留台）

東秋留駅から20分弱歩くと秋留台高校に着きます。20分のうち、半分くらいは畑の脇の道を歩きます。夏は、トウモロコシやトマトが日々大きくなるのを見ながら、冬は高い建物があまりないので、遠くに白い富士山を見ながらの通勤となります。行きも帰りも空が大きく感じます。そんな通勤をしてはや10か月が過ぎようとしています。

昨年度までの勤務先は、都心に近いところだったので、昨年度と比べれば、四季の移り変わりを肌でよく感じるができます。

また、秋留台は教員集団が若い。入都4年目未満の教員が全体の半数程度と多く、平均年齢も30歳代半ばと都立高校では比較的若い方ではないでしょうか。今年度から研修も若手教員育成研修となり、若手育成が喫緊の課題となる中、副校長が若手の育成のためには中心的な役割を担わなくてはならないと感じています。

教員が若いと学校での諸課題の解決への経験がないことや授業展開がうまくできないことが

難点となりますが、そこは副校長やベテラン教員が粘り強く教えていけば良いことだと思っています。反面、若い教員には機動力と素直さがあります。この若手の性質を利用しない手はありません。マニュアル世代ともいわれていますので、方法や目的をしっかりと教えれば、良く動いてくれます。

授業についても、授業観察をしてからの管理職からのアドバイスには、素直に受け止めてくれます。指導案の書き方から指導技術、授業展開、評価について、若手教員と協議をすることはなかなか楽しいものです。

時々、素直すぎて、思いもかけない行動となることもあります。また、TAIMSなどには、なんの抵抗もないようです。生まれた頃からコンピューターが身近に存在していた世代ですから、当然と言えば、当然かもしれません。

これからの東京都の教育を担っていくであろう若手教員を一人前に育てて、次の学校へと送り出していくことが秋留台高校の副校長の使命ではないかと思っています。さらに、この中からも将来、管理職や指導主事になる教員が出てくるはずであると思いつつ業務に取り組んでいます。

副校長に昇任して

北澤 良浩（東村山）

4月期待と不安のなか、東村山高校に着任しました。東村山高校は今年度からエンカレッジスクールとして再出発し、副校長二人体制になり、私が二人目の副校長として着任しました。

昇任したばかりの私にとって、同じ立場である副校長の先輩がいることは大きな安心感を持つことができました。二人体制は難しいという話も聞いていましたが、懐の深い校長先生の下、協力して職務に励むことができています。

毎日の業務の忙しさは想像を超えています。もし、一人だったらどうなるだろうと考えてしまうことも多く、一人で学校の運営をされている先輩副校長先生方のご苦勞を痛感しています。

東村山高校は教職員も新しい学校を作っているという意欲にあふれ、1学期は順調に進んでいきました。生徒たちも意欲的に学校生活に

取り組み、1学期を終わって240名中、80名が皆勤という結果も出すことができました。

私は、1学年担当としてホームルーム合宿の企画・運営を行いました。富士山の麓、山中湖での合宿は農業体験を含め充実した合宿になりました。エンカレッジスクールでは体験学習を行います。11名の市民講師との連絡や体験学習委員会の段取りなども行っています。また、平成25年に行われる東京国体の強化部活動として、東村山高校がビームライフルとボウリングに名乗りを上げ、その担当として、顧問の決定、講師との打合せや予算・活動日程などの手配をしました。2つの部活動とも部員も集まり、順調に立ち上げることができました。東村山高校としてここ1、2年が勝負だと思っています。経営企画室の協力も得て、教職員・生徒を盛り上げて取り組ませていきます。

そんな中、8月末から9月にかけて残念な事件・事故が起きました。究極の危機管理を経験することになりました。その際に学校経営支援センターや教育相談センターがすみやかにバックアップしてくださり、本当にありがたく思いました。学校のスタッフだけでは対応できない事柄にも力強い支援をいただき感謝の一語につきます。今後ともよろしく願いいたします。

昇任1年目から、なかなか経験できないことを経験させていただきました。二度と経験しないように先先を読んで行動していきたいと思えます。

現在、もうひとつ貴重な経験をしています。事件のあと、授業を週3時間担当しています。副校長になり二度とすることがないと思っていたので不思議な気分です。生徒と触れ合う時間を楽しんでいます。

今後とも校長先生のご指導の下、よりよい学校を作っていけるように努力していきます。また、先輩の副校長先生方のご指導をいただき、連携して職務に取り組んでいく所存です。よろしく願いいたします。

